

いのちの格差」の 解消をめざして



はんざわ多美

医療費の 窓口支払いの負担感

病気や要介護はなりたくてなるわけではありません。暮らしていると、ある日突然、病気や事故などに直面します。すると、病院に行ったり介護サービスを受けたりするようになるのですが、ほとんどの人に、そのとき医療費がかかります。医療費3割負担だとすると、風邪や虫歯などで病院を訪れると、多い時は1回5000円を超えるときもあるのではないのでしょうか。

高齢者世代では、窓口負担割合が年齢で変わります。75歳以上では現在、国の制度で1割負担になっています。高齢期になると病院を受診する必要性が高くなります。該当の高齢者にお聞きすると口をそろえて「1割負担は本当に助かっている」といわれます。

しかし喜んでばかりいられないのが今のご時世です。平成27年8月からは75歳以上の高齢者でも「一定以上の所得」の方は、医療費負担は3割となりました。また、今年の4月の財務省の審議会では、75歳以上の医療費1割負担を変更しての2割負担が提案されているのです。

医療保険は社会保険 公的責

任で誰もが安心して受診できるようにできる使命がある

ところで、先日、立教大学の社会保障専門の芝田英昭教授のお話をお聞きする機会がありました。「医療保険は社会保険の制度。社会保険は、誰もが起こりうる病気やケガ、高齢や失業というリスクにより困窮する状態を、公的責任で防ごうという制度。つまり、医療保険は、病気になったときに医療にかかれない状態にならないように、公的責任で保障するのが使命。高齢期に医療費の窓口負担を重く感じて受診を控え重症化することは、社会保険の趣旨から逸脱している。」また、「ドイツやフランスは保険の制度を確立して医療費の窓口負担はゼロに。同じく北欧のスウェーデンでも最近ほとんどゼロになった。イギリスも（原則）窓口負担ゼロ」とのことでした。

日本では、医療費の窓口負担が当たり前になっていて、それを前提に誰の負担割合をあげるのかということに躍起になっている風潮があることを一旦冷静に見つめることができました。確かに、所得に応じて医療保険の保険料はみんなで払ってきて

いるのに、そのうえ病気になった時にさらに年齢や所得などによって相応の医療費負担が割り当てられる今の日本の医療保険制度です。こうした制度では、病気になった時の金銭事情によっては、受診を控えることもあり、社会保険の趣旨に反するといえます。

医療費の窓口無料や1割負担を守りたい

私が医療費の窓口無料を実感として感じたのは、自分の子どもが受診した時に窓口で支払い請求がされないときでした。社会がこの子を大切な子どもとして必要な医療を受けさせてくれているそういう感覚がありました。社会保障の学習の中で、かつて、日本でも、高齢者の窓口医療費無料の時代があったという話ができました。大垣市では18歳まで子どもの医療費窓口無料や高齢者の医療を受ける権利を保障しようと踏ん張る「垣老」の制度もあります。

いのちに格差があってはいけません。すでに大垣市で実施されている制度は守り、誰もが、お金の心配せずに安心して必要な医療を受けることができる社会をめざしていきたいものです。